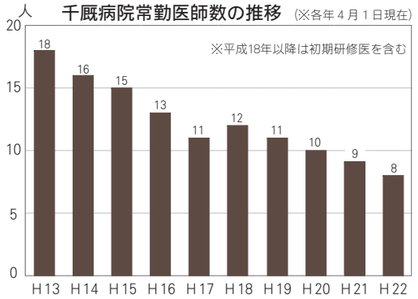
2 千厩病院の状況を聞く

医師数の減少が患者数の減、経営収支の悪化を招き厳しい状況が続いています。その一方、ボランティアが病院を支える仕組みができつつあります。

東磐井の医療の拠点、県立千厩病院

「宮古病院の偽医師事件は人ごとではありません」と真顔で語る県立千厩病院の伊藤達朗院長。県は医師招へいのため医師支援推進室を設置し徐々に実績を上げてきていますが、県立病院の医師招へいは基本的に各病院が主導。そして、常勤医のほとんどは大学から個々の病院に派遣される仕組みです。「新医師臨床研修制度により大学病院の医師が減ったことから、交通の不便な地方の病院や小規模な地域病院からの引き上げが行われ、新たな派遣ができない状態です。独自に医師を招へいするのは、現実的には大変難しい」と現状を打ち明けます。



東磐井の基幹を担うが医師数減少により厳しい経営続く

市内東部に位置し、藤沢町を含めた東磐井（人口約5万600人）の地域基幹病院として化器科、循環器科など14の診察科目を持ちます（整形外科、産婦人科、眼科は休診）。入院ベッド数は114床。そのうち4床は両磐地方で唯一の感染症病床で、昨年の新型インフルエンザ発生時には即座に発熱外来を開いています。

現在増加傾向にある慢性腎不全の人工血液透析を月平均で延べ約700人に実施。また、東磐井地域の福祉・介護施設の協力病院・バックベッドの役割を担っています。

24時間体制で救急患者を受け入れる同院。21年度は年間46・92人の救急患者を受け入れ。1日平均は14・9人で、そのうち時間外が12・2人と多くを占めます。

これらを中心となって支える常勤医は、5月現在で7人。診療科目は内科、消化器科、外科、泌尿器科です。このほかに外来や検査を中心として、磐井病院、岩手医科大、山形大医学部などから派遣されている非常勤医師が、1週間に約20人交代で勤務しています。

「一人の医師が責任をもって診察できる患者数は、一定の医療水準を保とうとすれば限られる。それにより、外来・入院とも患者数が減少するため収支面では悪化を招く。患者数が減少したとしても依然医師の負担は大きい」と語る伊藤院長。平日の当直は岩手医大、金ケ崎診療所、大東病院などから医師の応援はありますが、休日の日当直は同院の常勤医があたります。「日直当直は救急外来患者と病院全体の入院患者の両方の対応で忙しい。翌日も勤務するので、連続36時間にもなります」と厳しい現状を語ります。

「千厩病院福祉ボランティアの会」藤野宣子会長

病院内の花壇に苗を植える「花めぐり勝手に応援する会」会員

患者を支え、職員を支え、各種ボランティアが地域の病院を支える

その一方で、病院を支える地域の仕組みができつつある千厩病院。その草分けが、活動歴10年を越える「千厩病院福祉ボランティアの会」です。通院患者への自動受付機や会計機の操作補助、入院患者への本の朗読や歌、軽体操をはじめとした支援、環境整備などを行っています。

「以前は病院への不満ばかり言っていたものです。しかし県立病院の経営難を知り、負の財産を子供たちに残すわけにいかない。また経営難により千厩病院など地方の病院から切り捨てられるのではと危機感を持ち、できることは何かないか、と活動を始めました」と同会の藤野宣子（のぶこ）会長。「病院の環境が良くなるようなサポートを行っていく中で、少しでも多くの先生方が千厩病院に定着してくれれば。また病院に患者やその家族だけでなく多くのボランティアがかかわることで、病院のことを知るきっかけになるはず」と願います。

チューリップやハボタンなどがかわいらしく咲く春の同院花壇。花を植えているのは同町内の「花めぐり勝手に応援する会」。同会が花苗を定植し、福祉ボランティアの会が維持管理を行うという役割分担がこの数年で出来上がりました。

そして今年1月、地域医療を守るためにできることをしたいと「朝顔のたね―千厩病院を守り隊」が発足。伊藤院長は「たくさんのボランティアにかかわっていただき大変ありがたい。一般の人との交流は病院職員にとってもいい影響が出ている」と感謝します。

今年4月、昨年度同院で臨床研修を行っていた2人の医師が常勤医としての勤務を開始。岩淵美希医師は「将来は精神科を目指しているが、研修でお世話になった千厩でもっと多くの症例を経験し、医師としての力を蓄えていきたい」と抱負を述べていました。

病院がなくなったら大変 病院と住民のかけはしになり 現状を学ぶことから始めたい

朝顔のたね―千厩病院を守り隊
同院の医師不足解消を目指し、地域医療を守るための医療情報の学習や情報発信、医療従事者との交流を行う。会員40人。
写真は左から伊藤真実さん（事務局長）、佐藤敦子さん（副会長）、遠藤育子さん（会長）、畠山とき子さん（事務局）

きっかけは昨年11月、「千厩病院を知ろう～病院との交流会」に参加したこと。現状を聞いて「このままでは病院がなくなってしまう」と危機感を持ち、まずは現状を知ることから始めようとこの1月、活動をスタートさせました。

これまで、わたしたちは医師の過酷な勤務状況も知らずに、要求ばかりしていました。まだ何をしたらいいのか分からないので、学ぶことから始めます。少ない人数でも、それぞれの会員が知ったことを周りに伝えていけばいいと考えています。

これまでの活動としては、3月、退任する医師に感謝する集いを開きました。普段、診察室でしか会わない医師に患者として感謝を伝え、寄せ書きを贈りました。医師による講演会も行われ、わかりやすい話に感激しました。会場はほのぼのとした温かい空気に包まれ、短い時間でしたが、心と心のキャッチボールができたとうれしく思っています。

今年は、病院が行っている出前講座の開催を自治会に呼び掛けたり、先進地に出向き事例を学ぶ計画。病院と住民のかけはしになりたいと願っています。

住民が求める医療と医療者が提供できる医療にギャップ 対話することで互いに共感を

岩手県立千厩病院
伊藤達朗（たつろう）院長
岩手県立二戸病院などを経て平成19年5月、千厩病院長に着任。53歳

患者や地域住民との対話を大切にしたいと病院独自の医療懇談会や、地域へ出向いての出前講座などを行っています。21年度は総合診療科の開設などもあり、3回の懇談会を開催。医師不足などを含めて、現状をそのまま話しています。

東磐井は高齢化率が30％以上。医療と福祉は表裏一体、それを視野に入れなければなりません。連携がうまくいかないと、退院後すぐ再入院することになったり、逆に病床がいっぱいですぐに入院したい人が入院できない状況になります。

市民の皆さんには、▽できるだけ平日の診療時間に受診すること▽検診を受けること▽自ら健康管理をすることーなどを徹底してもらうことで、医師への負担が減ります。また行政には、▽限りある医療資源の使い方の啓発▽勤務医への生活支援▽医療と福祉の連携を前提とした施策ーなどを望みます。

医療者は、住民によりよい医療を提供したいと思い、住民はよりよい医療を受けたいと願っています。立場は違っていても、医療に対する考え方は基本的に同じです。対話を重ねることで互いに共感し、強い信頼関係を築いていきたいと考えています。